

ロボット放送が、やってきた!

スピーシーズ株式会社

2004年、ロボット技術とIT技術の融合をめざして設立。同年、二足歩行ロボット組み立てキット「Speecys(スピーシーズ)ロボットキット」の商品化を皮切りにスタートする。ネットワークOSにはNetBSDをベースOSとして採用し、その上に各種ドライバや制御ソフトをインプリメントすることでロボット動作を実現し、ネットワーク技術とロボット技術の融合を図っている。現在、ソフトウェアエンジニアのためのロボット「SPC-101C」を用いてインターネットロボットの応用・利用を推進するほか、ロボットタレント派遣事業、さらにはコンシューマー向け低価格帯インターネットロボットの開発に取り組んでいる。

人型をしてリアルな動きや成果をあげる精妙な装置? 意のままに動かせるペット感覚のマシン? 高度化する開発技術があるいっぽうで、マニア以外のニーズはまだ未成熟という、いまロボットの世界はまさに過渡期にある。そんな中、新たに「ロボット放送」という概念を掲げ、ビジネス展開を果敢に試みる人々がいる。家庭で楽しめるコンシューマー向け低価格ロボットに情熱を注ぐスピーシーズ株式会社を取材した。

チェコの国民的作家カレル・チャペックが、その作品の中で「ロボット」という言葉を「発明」して以来、およそ90年。人類が未来に紡ぐ夢の一つであるロボットは、日進月歩の進化を遂げてきた。困難と言われた二足歩行があたりまえの技術になり、ソニーの「AIBO」(1999年)あたりから、ロボットに対する視線はグッと日常のほうに近づきつつある。

しかしながら一般の消費者にとって、ロボットといえばいまだに、アニメや映画の中に登場する、まだまだ非現実的な万能性・非日常性によってイメージされていることも確かだ。技術はもうそこまで来ている、けれど人々の意識はあと一歩。そんなロボットと私たちの関係を柔らかくつなごうとしているのが、スピーシーズの「ロボット放送」である。

ロボットをメディアにしたい

「ずっと前から、“ロボットをメディアにしたい”と言い続けてきました。パソコンが画面とキーボードで人とインターフェースするものであるなら、ロボットは中にCPUが入っていて、手足の動きで人とインターフェースする。私たちが手がけているロボットは、インターネット上にある情報を、より魅力的に、面白く人に伝えるためのアウトプット・デバイスであって、その意味でロボットもある意味、パソコンです。極端に言えば、動くか動かないかの違いしかない。もっとも、その違いが決定的なのですが」

スピーシーズ株式会社の春日知昭CEOにお話をうかがう。スピーシーズは現在、「ロボット放送」というユニークな概念を掲げて活動を展開するロボット製品・サービス提供会社だ。インターネットの専用サーバー、ロボット本体、ロボット専用コンテンツのトライアングルを稼働させてロボット操作をする仕組みだが、サーバーが放送局、ロボット本体が受信機、コンテンツが番組と考えると、すなわちこれは「放送」ということになる。

スピーシーズでは、この6月に「ロボット試験放送評価キット」を発売し、試験放送を開始。次なるステージとして、来年2月(予定)



スピーシーズ株式会社
http://speecys.com/

インターネットロボット「SPC-101C」。PCにインストールしたモーションエディタでモーションを自在に制作、無線LANを通じてロボットに送信し、操作する。頭部にはカラービデオカメラを搭載(NTSC出力、受信機付属)。ビデオ画像をキャプチャしてネットワークを通じて画像認識や監視、歩くWebカメラとしても利用可能である。



ロボット放送情報サイト「ロボタミア」
http://robo-pro.com/robotamia/

に「ロボット放送次世代メディアロボット」をリリースすることになっている。

ロボット放送の仕組み

「ロボット試験放送評価キット」は、ロボット本体「SPC-101C」に、独自のOSを組み込んだminiSDカードが1枚、さらにロボット放送アプリケーション「BotRoller」という内容で構成される。価格は39万9千円。これが「次世代メディアロボット」となると、想定価格帯は、6~8万円と一気に下がる。ロボット本体のサイズも、「SPC-101C」が身長30cm強、重さ1.5kgに対し、身長約23cm、体重約500gとかわいらしくなる。

「私たちは、めざせ、一家に一台、と言っています。けっこう本気です(笑)。小さな家族が1人増えるような感覚で接していただきたいんです」

さて、「ロボット放送」で可能になることとは、具体的にどのようなことなのだろうか。

「大きく、コミュニケーション、インフォメーション、アシスタンスの3つに分類しています。コミュニケーションでは、例えば頭部にカメラが備えられているので、遠隔操縦可能な、歩くWebカメラとして捉えることができたり、動きのあるメッセンジャー、自作コンテンツの配信や共有ができます。インフォメーション機能としては、画像と一緒に踊ったり、ニュースや天気予報などWeb上の文字情報を動きながら話したり、企業のCMなども可能です。そしてアシスタンスですが、アクションを伴った目覚まし、タイマーやスケジューラー、大切なアニバーサリーを教えてくれたり、あとはまるで人格を持った生き物のように、ぶつぶつ独り言を言ったり(笑)、そんな自動操作も可能です」

「ロボット放送」の概念は3要素から構成される。まず、ロボットに無限のコンテンツを提供するインターネットサーバーは、テレビの放送局に相当する。ロボット本体は、放送を受信し、再生することからテレビ受像機に相当。そしてロボット専用コンテンツは、テレビ放送の番組に相当する。

ロボット放送局
(インターネットサーバー)

ロボット放送に必要な3要素

家庭用
メディアロボット
(ロボット本体)

ロボット放送番組
(ロボット専用コンテンツ)



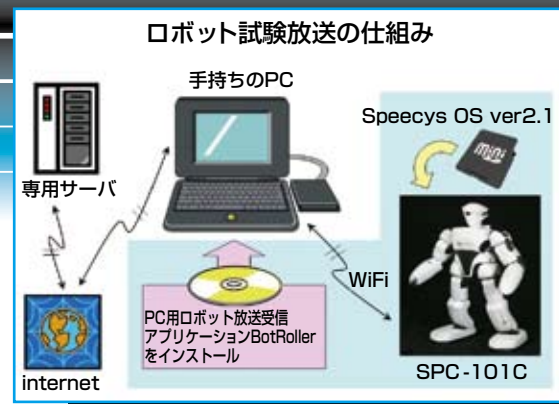
PC用アプリケーション「BotRoller」を使用した「SPC-101C」のアクション。

放送局に相当する専用サーバーから送られてくる情報を、PC上でHTMLに加えスピーシーズが独自に開発したスクリプト言語であるRTMLと併せて自動生成。ユーザ（クライアント）は、Webや音楽との同期、編集が簡単にでき、ロボットの動作を作ること、しゃべらせる（音声合成）ことも容易に可能になる。

「感情移入」できる。「分身」になる

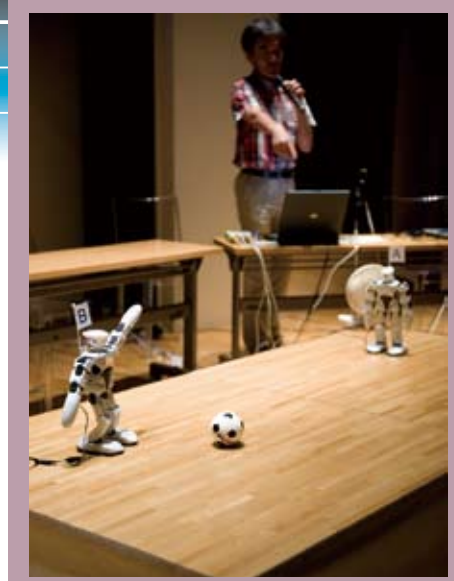
ロボット放送の重要なコンセプトは2つあるという。ワードで表現すれば「感情移入」と「分身」だ。春日氏はこう説明する。「私たちはロボットはメディアであり、パソコンの一種だと考えていますが、決定的に違うのは動きがあるということですね。動いた

とたん、そこに一個の人格が付与されたかのように、感情移入が生まれます。例えば私たちのロボットを、皆さんにお好きなようにカスタマイズしてもらい、より細かくキャラクターづくりを進めていただくとします。単に“料理好き”ではなく、“特にエスニックが好き”といったふうに。すると、“今度何丁目、〇〇というエスニックレストランができたよ”なんてしゃべってくれる。これ、パソコンから



これが、ロボット試験放送の「評価キット」である。手持ちのPCにロボット放送受信アプリケーションである「BotRoller」をインストールし、OSには、汎用性の高いUNIX系のNetBSDをベースに独自のOS「Speecys OS ver2.1」を使用している。PCとインターネット環境さえあれば、誰にでも利用することが可能だ。

ロボット放送受信アプリケーション「BotRoller」の画面。アイコンを表示してロボットの動きを選択したり、カメラを使って遠隔地のロボットをコントロールしたり、Web画像や音と同期してロボットにしゃべらせる、歌わせる、踊らせる、RSSの読み上げによりニュースや天気予報、交通情報を伝えるなど、さまざまな機能が満載。



このように別個のPCに接続した複数のロボットに、専用サーバを通じて会話を交わしたりすることが可能である。写真は、サッカーに興じている構図。

そういう音声が出てきたら、きっと鬱陶しいと思うんです。でも、ロボットが言ったら許されるんじゃないか(笑)。コンテンツって、そういうことじゃないかと思うんです」

「ロボット試験放送評価キット」である「SPC-101C」は、写真のように、明らかに「男性」に分類しうる造形だが、「次世代」のほうは、ユニセクスの容姿・デザインになる予定だという。いわば男の子にも女の子にもなれるロボット。果たして、そこにはどんな感情移入が生まれるだろうか。そして、人とロボットの関係でもう一つ重要なのが「分身」という考え方だ。

「自分の分身をつくり上げていく、という楽しさですよね。クルマが好きだったら、そういう嗜好を入力していったら、ロボットがもたらしてくれるクルマ情報を受け取ったら、またそれに対してリターンしていく。そうするとどんどん複雑な個人情報や履歴が、ネット上に蓄積していきます。ちょっとばかりスピリチュアルな話になるようですが(笑)、私はロボット本体というのは、いわば肉体だと思うんです。で、複雑な個人情報や履歴が魂であると。魂は、肉体にはなく、ネット上にある。だから、実は1つの魂が複数の肉体(ロボット本体)を持つことができるし、逆に1つの肉体に、複数の魂が憑依することだって可能なんです」

ロボット創造委員会と協業の可能性

スピーシーズでは、ロボット放送を、ラジオ、テレビ、PC、携帯電話に続く「第5のメディア」と捉えているという。ITとロボットの融合を図り、ユーザーフレンドリーであることはもちろん、開発者にもフレンドリーなインターネットロボットを目指している。価格の壁だって破らなくてはならない。

「我々のロボットは、家族と一緒にリビングに居るのが理想です。PCをリビングに置いている方って少ないですよね？ たいていは書斎や勉強部屋でしょう。そういう意味では、リビングに置かれる最初のコンピュータになるかもしれません。ひたすらアクロバティックな動きをさせるとか、そういうマニアックな方向に行くことは、コストをかければ技術的にいくらでも可能です。しかし、それではごく一部の人たちのものになってしまう。コンシューマー向けの価格帯を実現するためには、どんどん情報を開示して、開発過程までエンタテインメントにしてしまっ、企業のプロモーションなどにも活用してもらい、多くの方に知っていただいて買っていただくことが必要なんです。そうすればまた進歩して、さらに低価格が実現できるわけです」

リビングの似合う、コンシューマー向け低

価格インターネットロボット。スピーシーズの提案するロボット放送は、圧倒的に男性主体だったロボットの関心を女性のほうへ、理系の風土から文系へ、ハード指向、目的指向からソフトウェア指向へと転換したものと考えられるかもしれない。

「ロボット創造委員会のような形態を考えています。近年、日本映画の多くが映画製作委員会の形を取っていますが、発想は近いかもしれません。エンジニアをはじめクリエイター系の人々、これは大学や専門学校の協力を仰ぎます。真ん中に製作者である我々がいて、どんどん環境を提供します。そして利用者（消費者）の、“こんなロボットにできないか”という声を吸い上げていくんです。この委員会の活動を活発にして、企業やメディアとの共同プロモーション、広告やPRへの利用、販売店や量販店との販売協力、コンテンツ開発など、多くの方たちと『協業』していきたいですね」

家庭にPCがあれば、そしてインターネットのできる環境であれば、誰でもリーズナブルなコストでロボットとの共同生活が楽しめる。そんな暮らしが、もうそこまで来ている。来春のロボット「本放送」が待ち遠しい。

Text by : 直哉モレッティ